

## 新岡垣風土記

第455回

## 岡垣のため池①

岡垣歴史文化研究会 石田 健次

明治8(1875)年から明治13(1880)年にかけて編纂された地誌に、「福岡県地理全誌」がある。「遠賀郡」の部分は、明治6(1873)年から2年をかけて調査されたものである。

この地理全誌に、各村々の「池塘」についての記載がある。池の場所、官費・民費の別、水面の面積、水掛田の面積、築造年が詳細に記載されている。

これによると、当時の遠賀郡は85の村々に、60力以上のため池が存在していた。岡垣には98力所のため池があり、その内、築造年が分かっているものは57力所で、そのすべてが江戸時代に造られている。築造年が不明となっている中には、江戸時代以前に造られたものも相当数あると思われる。

江戸時代に作成された村絵図には、このため池は「堤」として描かれている。

## ため池は何故必要だったのか

農作物を栽培するためには、農業用水は不可欠である。農業用水の確保には河川を堰き止めて利用することが一般的で、岡垣域内では汐入川と矢矧川が農業用水として利用されてきた。しかし、これらの河川の恩恵を受けることができるのはその流域に限られる。汐入川は、手野、三吉、吉木、松原の各村が、矢矧川は、糠塚、黒山、山田、海老津の各村が農業用水として利用してきた。これ以外の地域では、ため池を造って農業用水を確保する必要があった。

また、早魃をきっかけに新たにため池が造られることもあった。

江戸時代の鬼津村(現在の遠賀町鬼津)の状況が記録された「年歴算」によると、30日以上の日照りが頻繁に起きていたことが記

録されている。特に、嘉永6(1853)年には5月23日から8月2日にかけて70日間の日照りが続いたと記録されている。この時は、高倉・野間・松原・吉木・三吉・手野・内浦・原・波津の各村では、稲が枯れて収穫できず年貢の減免を受けている。これらの地域には、築造年が分かっているものだけでも嘉永年間以前に造られたため池は、40力所あったが、これだけの大早魃には対応できなかった。

この大早魃の被害を受けて、高倉村と吉木村には新たにため池が造られている。

## 早魃と雨乞い

早魃のあった年には藩による雨乞いのほか、郡や村々でも様々な雨乞いが行われている。福岡藩時代の一郡一社の宗廟である高倉神社では、袈裟流の祈禱が行われている。袈裟流は、杜僧が波津浦から船で波津城瀬に行き、袈裟を流して雨乞い祈願をするものである。

嘉永6年の大早魃の時は、高倉神社や吉木村の勝業寺で雷山の快然大律使を招いて祈禱を行っている。他の村々においても、地元の寺社に参籠するなどして雨乞い祈願が行われたことが想像される。

## 江戸時代のため池

江戸時代には数多くのため池が造られた。

遠賀郡でため池が本格的に造られるはじめたのは、江戸時代前期の寛永年間からと思われる。寛永元(1624)年に頓田村(現在の北九州市若松区頓田)で造られたため池が一番古いもので、寛永年間の18年の間に、遠賀郡内では6力所のため池が造られている。

岡垣域内で一番古いため池は、山田村(現在の百合ヶ丘)にある鍋田池で、寛永18(1641)年に造られている。

その後、明治までに数多くのため池が造られてきた。

これらのため池の造成では、農民に歩役としての労役が課されており、規模の小さなため池であっても完成までに数年かかることもあり、農民の負担は大きかった。



▶山田村絵図に描かれた鍋田池

つづく